

書誌宇宙論：図書館学からみた書物の世界 II

菊池 しづ子

1. 書誌宇宙のハイパーテキスト化

従来わたしたちが考えてきた書誌宇宙とはモノとしての文献の世界であった。従って、モノとして同定し、記述し、その所在や入手方法を明らかにするということがであった。そこでは常にモノと著作、テキスト、主題、利用者のうけとめかた、といったこととの関係が問題とされながらも、図書館学の方法では、モノであるということを優先する、という原則が採られてきた。しかし、メディア(モノ)や複写手段の多様化など技術的社会的な様々な変化によりモノとしての側面と、テキスト、内容との間の乖離が徐々に顕在化しつつあるということは、これまで述べてきたことから明らかであろう。

このことはわたしたちが過渡的な時期にさしかかっているということなのかもしれない。わたしたちは、資料は印刷物という大前提のうえで索引化を進めつつ、データベースなどは補助的なものとしてとりこんできた。しかしこの大前提自体が存在しえなくなったとしたらどうなるであろうか。すなわち、電子出版により、資料というモノ、著作を包んでいたパッケージが取り払われ、テキストが剥き出しになるという事態である。

電子出版が進んだ場合の書誌宇宙とは、どのようなものか。それは紙なし情報システム、ペーパーレス社会ともいわれ、簡単にいえば、出版、流通、蓄積、利用が一体となったシステムである。従来の出版における印刷物というモノ(パッケージ)が消滅し、すべての文献が複雑な書誌階層関係から解放され、ネットワークにより自由にアクセスでき、利用者はあらゆるテキスト(まとまったものであれ、断片的なものであれ)を自在に読んだり、切りとって自分のものとしたり、どのような領域のテキストであれ自由に関連づけることのできる環境である。

これは究極の理想として Bush の想像した memex につながるものであろう⁽¹⁾。書齋にいて机の前に座ったまま古今東西の必要な文献が即座に取り出せ、その場で見られるシステム、連想したり、引用されたものがすぐに引き出せる検索システム、自分が思い付いたこともそこにすぐ書き込めて利用できる、Bush が知らなかった現代の用語でいえば、理想のワードプロセッサ、アウトラインプロセッサ、世界図書館、検索システムが一体となったものが memex であった。そして、ハイパーテキストは memex を実現

しようとして開発されてきたものだということができよう。インターネットの世界では情報はハイパーテキスト形式で提供されている。但し、それはインターネットの世界の中だけでのことであり、図書や雑誌も含めて全ての情報が一体化されてハイパーテキストにならなければ memex は実現しない。

先に「索引化」が比較的進んでいる分野が星雲のように存在する、と述べた。従来はこのような分野に限っては電子出版が進むであろうと考えられてきた。各々の限られた分野の中の限られた研究者達はあまり抵抗なく歓迎するだろうと考えられてきた。どうせ新しい雑誌はますます高価で買えないし、必要なものは個々の論文毎にコピーを取り寄せるし、そうしていると雑誌はますます売れなくて高くなるしの悪循環なのだから、はじめから電子出版されたらいい、レフェリー制度とか雑誌としてのステータスが保ちたいならそれはそれで電子出版編集部をつくれればよいのだから、と。既に彼らはデータベースの利用や電子メールなどのネットワークの利用に慣れているし、情報が得られればパッケージなどないほうがよいと考えるだろうと。しかし、そのような分野は書誌宇宙においては散在するのみであって、文献の数は多いが利用者は限られており、限られた範囲でなければ使えないということは既に述べた。そのような限られた分野の研究者でない人々、フィクションを主に買って楽しんで読む人々(もちろん、上記の分野の研究者でも研究以外の読書では普通の読者になる)や、思想書を読んで社会を理解したいという人々や、何かの興味や必要によって特定の事柄についてのまとまった知識を得ようとする人々や、人文社会系の研究者など多くの人々はそのほとんどの状況において、情報検索の恩恵にも、引用索引の恩恵にも浴していない。単行書は論文のように簡単にコピーが入手できるわけでもないので未だに書誌と目録、書誌的情報と現物との乖離は変わっておらず、利用者は昔とほとんど同じように(不自由に)過ごしてきたのだ。新聞は相変わらず毎日大きな紙に印刷され、各家庭に一つ一つ配達されている。書誌や索引、事典類などレファレンス・ツールの世界ではデータベース化が徐々に進められているが、それはあくまで2次資料のレベルのみのことであって、2次資料によって導かれて実際に読まなければならない資料自体は以前と変わっていないから、統合的な「索引化」には到っていない。

例えばデータベースで新聞記事を検索しても、全文が収められているとは限らない。20年以上前の新聞はデータベースにもなっていない。だから実際の新聞がおかれている図書館を探さなければならないのだが、一方モノとしての新聞はかさばりすぎるし劣化が激しいから、半年や一年で廃棄されてしまう。マイクロフィルムまで収集している図書館は少ないので、そこまでわざわざ出向いてリーダーに向かって読まねばならない、という具合である。あるいは、ひとつのテーマに関するさまざまな議論が、どんな雑誌

や新聞や図書の中で、どのように発表されてきたかということをとどろうとしたら、容易なことではない。それは、文献がさまざまなメディアのパッケージの中に入っているからである。よく図書館情報学で行われている引用研究は、引用索引が作られている特定の分野の特定の雑誌の範囲の中だからできることなのである。

モノとしてのパッケージに納められていることがすなわち著作としての独立性を持つという暗黙の了解は、私たちの日常にとっても、索引化の側にとっても大きな問題であった。先にふれた編集性にしても、誰のどの著作をどこで切り離してどれと一緒にしてひとつのモノ、すなわち図書にするかということに関わってくるのである。本来ひとつのモノイコールひとつの著作ではないにもかかわらず、編集によってモノとしてまとまっているからすなわちひとつの著作だとわたしたちは受けとめてしまう。モノとしての体裁、たとえばページ数や値段などの都合で取捨選択される場合もある。あちこちにばらばらに発表されたエッセイのうち、これはある図書に収められ、あれは収められなかった、ということは著者や編集者にとっては必然性があったとしても、読者にとっては納得のいかない場合が多いし、またそれゆえに書誌的にばらばらとなり、入手しにくかったり、知る機会がなかったりすることになる。

文献がすべてモノから解き放され、ハイパーテキスト状況にいたると、引用文献を探すということが、書き手にとっても読み手にとっても容易なこととなる。わたしたちはいつでも自由に文献のネットワークの中を自由に行きつ戻りつすることができるようになり、書誌や索引を探し回ったり、さらに文献入手のためにあちこちに足を運んだりする必要がなくなる。

つまり、現在のところ、この世界においては、「索引化」は分野で切ったり、メディアタイプで切ったりして分断化され、しかもそれぞれできる範囲でそれぞれ異なった形で行われているのである。それぞれの間の関連はつけられていない(リンクされていない)し、もともと索引化の全くされていない領域の方が多い。従ってわたしたちの情報の探し方ときたら全く多様、或いは支離滅裂というのが昨今の状況だといえるだろう。一方でオンラインやCDで入手できる情報は、既に把握できないほどの量に膨れ上がっている。

そこで、今後この書誌宇宙において「索引化」が進められるにはどのような問題があるのか、また電子的な資料や情報はどのように捉えたらよいのか、いくつか取り上げて考えてみたい。

2. 書かれたモノの重さ

書物に慣れた人々の電子出版に対する反応はつぎのようなものではなかるうか？……
百科事典のCD-ROM化？ 便利なんじゃない、場所もとらないし、色々便利な検索

法があるだろうし。シェイクスピアの全文？シェイクスピアの研究者ならともかく、普通の人がハムレットを読むのにコンピュータなんて使うわけがない。だいたいドストエフスキーは文庫本で読んだってだめで、あれは中身の重さに合わせてハードカバーの立派な本で読まなきゃいけない、といった人もいるくらいで、ましてやディスプレイ上でドストエフスキーなんて。「果てしない物語」ではページによって画面や文字の色が変わるのだろうか、でもコンピュータで読む場合には本当の意味でのページってものはなくなるのだが……。

こういった反応には実は多くの問題が含まれており、それらは非常に重要な無視できない様々な側面を持っている。

ひとつは通読する図書と、調べるための図書に対する直感的な区別である。書かれたものとしてはじめに生まれたのは裁判や取り引きの記録や、遺言、法律、名簿など記録物であった。こういったものは話し言葉だけの世界では存在し得ないものだからである。思想や文学というものはない。書誌や索引といった2次資料や電話帳や理科年表のようなものと、文学作品や哲学書のようなものは「書かれたモノ」としていっしょにして考えるべきではない。前者は相当保守的な人でもある程度道具として、技術的に容易に必要な情報が得られればその形態にはこだわらない類のものである。後者すなわち通読できるような作品については、見解の分かれるところであろう。

もうひとつは図書がモノでなければならないというこだわりである。話すことで思想や物語を語ったのは久しく遠いことになった。人は書くことを知ってから、大切な物語や思想は必ず書いておくようになった、或いは書かれないものは語り伝えられるものを除いてめったに時代を越えて伝えられないから存在しないも同じことである。そしてそれが手書きでなく、印刷物という全く同じ物のコピーという形態で量産される、すなわち出版ということがひろまって数百年だが、わたしたちが接する書かれたものはほぼ全てがこの形態である。

以前図書が入手困難な時代、そしてリテラシーの低い時代には、図書は一人の人が読み上げて他の人はそれを聞くという、朗読されるものだった。また、書かれた言葉は生の思想が伝えられないという考えもあった。しかし現在のほとんどの本は、聞くようにはなく読むように書かれている。事実やデータの記録から思想や物語を書くようになってから、話し言葉と書き言葉は別のものでなってきた。

本を読むということは、著者がいろいろと考えたことや作り上げた物語を、直線的に持続的に緩むことなく書いたものを、わたしたちもそのまま持続的に辿っていくのである。従ってそのような読み方をするには現在の図書は適した形態と考えられる。それは集中的で緩みのない世界を作る。時としてあれこれ遡ったり、読み直すようなことがあつ

ても、それはページをばらばらとめくって見ればすむ程度のものである。このような集中的で緩みのない世界を読者に要求し、また読者がそうできるのは「書かれたモノ」のもつ独特の力かもしれない。バーカーツはいう。

“ベビーブーム世代は世界を処理する多重トラックの能力をもっている。…しかしわれわれはそれがとどの詰まり、ある種の集中的な深い読書にとってよい前兆ではないことを理解しなければならない。多重トラックの感受性では、ものいわぬページによって要求される単一トラックの骨折り仕事をなし遂げることが、恐らくいよいよできなくなるであろう。”⁽²⁾

図書というモノにこだわるということはフェティシズムだけによるものではない。不思議なことに同じ「書かれた言葉」であっても、実際に重さのあるモノである図書と、電子的な言葉ではその作用が違うのである。つまり電子的な言葉には重さがない。図書に書かれた言葉には独特のノイズ、即ち書かれた言葉に伴う言葉以外の情報——ノイズという余計なものというマイナスの意味だが、ここでは付加価値の意味だ——が含まれているのである。

この図書の持つ付加価値といったものは既に時代とともに少なくなってきた。写本の場合には印刷物よりもっとこの重さは大きかった。なにしろ一つ一つがオリジナルなのだから。それゆえせめてもと、グーテンベルグは活版印刷をするとき手書きのものにできるだけ似せた文字で手書きのような印刷物を作ろうとした。とはいえ印刷物はコピーだから美術品のようなアウラはなくなっていったが、著者性というアウラがまだ残っている。さらモノであるというのがアウラの源となっている。書物には著者の魂がこもっているから乱暴に扱ってはならないといわれたり、装丁やレイアウト、活字を書物の内容にふさわしいものにする、といったことに様々な工夫がなされる。私たちは巻き物よりもランダムアクセスの楽な折り本に慣れているから、ワープロに向かって作業するときしばしば、ちょうどビデオテープを巻き戻したり、早回ししたりして求める場所を探するときのようないらだきを感じず。章が変わるときには頁があらたまっていないとすっきりしない。各ページの余白や書体は同じでなければ読んでいて集中できないし、逆に文字の大きさや色などによって読者は気分を変えることもできるというように、こういったことは単に文字情報を伝える以上のさまざまな付随的な意味を読者に伝える。重たい内容の図書は重々しい装丁が似合うし、軽い内容なら文庫本がふさわしい、というようにモノの体裁も内容に合わせられる。こういった様々な付加価値が図書に重さを与え、それが電子的な言葉にない作用を読者にもたらし、また読者もそれを受け止める或る種のリテラシーを必要とするのである。

しかし、手書きから印刷になり、更に印刷物は軽薄短小化され、大量生産され、「消費」

され、捨てられるようになって、既に書かれた物のアウラは以前よりはるかに落ちてきているのであり、これが更に進むことは嘆くべきことではないのかもしれない。ただ少なくとも現在の時点では、多くの人々はこの書かれたモノのもつ(物理的な)重さを一方で厭わしく思いながらも、文学や思想の世界では存続することを望み、またその(抽象的な)重さに耐え得る精神力が人には必要だと考えている。

しかし一方研究上の読書ではどうかというと、実際わたしは本を読んでいて注に出会ってそれが気になると注のところに筆を挟み、注がでてくる度にそこを何度も何度もめくりながら、一直線の読書が中断されたことにいらだちながら、一方で注を見ないと気になる状態にいらだつ。ときには読書を中断して注をメモして図書館に走り、その文献を探し、ない場合にはコピーの取り寄せなど依頼して、結構な時間を使ってしまい、また図書に戻ると以前のように集中できなくなってしまい、注など気にせず、まず一気に読めばもっと印象が強が残ったのに、散漫な印象になってしまったと後悔する。また読書を続けながら寄り道するにしても、図書館に行ったり面倒な手続きなどしないで、注をクリックすれば即座に引用された文献が画面にでてきてそこが読める、あるいは引用文献の全文が読みたければいつでもそれを呼び出して読める、または依頼というところをクリックしておけばあしたにはその本が手元に届けられる、というようになっていたら、つまり文献世界がすべてハイパーテキストとしてリンクされていたら面倒がないのに、と一方で考えてしまう。

わたしたちはまた、テキストレベルの索引をも熱望してきた。あるテーマについて誰がどこで何と書いているかということは、誰かが見つけたことを蓄積していくか、偶然見つけるしかない。せめてもということで、有名な作品や作家の作品群に対してはコンコーダンスが作られる。名言辞典が作られる。類書は古典群に対するコンコーダンスともいえる。文化人類学で作られている HRAF (Human Relations Area Files) は古典的著作群に対するカード状の内容索引ともいうべきものだが、図書室ひとつを占領するほどの膨大なカードのファイルを目にすると、手作業の時代からのテキストレベルの索引への熱望と、それを作ろうとする執念めいたものに感嘆せずにはいられない。昔から索引作りには大変な労力が必要だったのだが、テキストそのものが一旦データベース化されれば、テキストレベルでの検索は(その精度には技術的その他の難しさがあるとはいえ)可能となるものなのである。

重さのあるモノとしての図書の存続を望み、かつ書誌宇宙の索引化と図書の物理的なアクセスの障壁を消滅を望むとしたら、考えられる方策は両方とも存在させるということしかないだろう。

現在あちこちで古典的な著作や図書館の蔵書を全文データベース化する作業が進めら

れているが、これは保存と縮小化と配布のためである。保存と縮小という目的だけならマイクロ化と同じだが、むしろ重要なのは配布である。従来の図書はモノであるために、物理的な入手という最大永遠の問題を抱えてきたわけで、電子化することによって利用者は自分のコンピュータの端末でテキストだけは（重さのない図書として）読むことができるのである。モノとしての図書を読みたいといっても、それはモノが手の届くところにあつての話である。データベース化が進めば、人は自宅にいながらにして、遠隔地の図書館の蔵書や帯出禁止の貴重書を、コンピュータを使って重さのない図書として読むことができる。

現在インターネット上の書店では、図書を検索して注文すると即座に届けられるようになってきているが、注文すると即座に自分のコンピュータにファイルが届けられる、というシステムになる可能性もある。実際現在の図書はほとんど機械可読ファイルから打ち出したものなのだからもともと重さのない図書として作られているのである。それをモノとしての図書として売り出すなら、もともとの形で売り出してもよいはずである。読者はどちらかの形態を選べばよい。

ディスプレイは早晚もっと見やすいものになるだろうし、コンピュータはずっと小さく、わたしたちが今本を持ち歩くのと同じような大きさになり、わたしたちは、電車の中で読むために文庫本を鞆にいれるように、前夜ラジオから音楽を録音したカセットテープをウォークマンにセットして鞆にいれるように、インターネットで「推理小説コレクション」などというファイルから最新のミステリをポケットサイズのコンピュータにコピーしておいて、それを鞆にいれて通勤するようになるかもしれない(通勤なんてしないで在宅勤務だろうという意見もありそうだが)。

肉眼で読みたい場合、手元に保存したい場合などには高価でも図書の方を購入するか、プリントアウトしたものをそれぞれで綴じておくことになる。想像を進めてしまえば、もしかしたら個人向けの製本機が一般化して、DTPで各人が好みのレイアウトやフォントでプリントして、製本機を使ってオリジナルの1冊を作って楽しむ、などということになるかもしれない。そうなると、テキスト自体が1冊1冊異なるという、手書きの時代に逆戻りするような状況が生ずる可能性があるが、そのことについては第4節で考察する。

特に障害者の読書においては画期的な改善となるだろう。今までの出版だと出版する側で一方的にアウトプットの形態、すなわち字の大きさなどを決めてモノとして作ってきたために、それを点字化したり、録音図書にしたり、すなわちメディア変換しなければならなかった。しかしコンピュータでテキストを得れば、それを大きな文字でプリントすれば自分に合った大活字本ができるし、点字プリンターで打てば点字本ができる。

上述のような可能性は、まさに出版がモノでない剥きだしのテキストだけを配布することとなり、テキストとモノの分断化が明確となる。また、モノ化するか否かは読者に任されていることにより、モノとしての価値の付加作用が出版側の支配から離れてしまうことになる。

実際上の問題は著作権の処理と、著者本人がどうしてもモノとしての図書として作ることに執着する可能性である。実はちゃんと形ある図書でなければ出版したことにならないという感覚は、比較的ドライなはずの科学系の研究者の世界でも根強く続くであろう問題である。というのは研究者にとって論文を発表するということは業績として残すということであり、フォーマルな業績とするためにはモノとしての出版物にしておくということが当分必要とされるという考えもあるからである。すなわちモノでない電子出版による著作はどうしてもインフォーマルなイメージが付きまとうのである。それは実際インフォーマルな書かれたものが氾濫しているからでもある。次にそれについて述べる。

3. 重さのない書かれたもの

書かれたものというのはモノとなり、フォーマルな情報であったはずなのだが、昨今インフォーマルな書かれたものが出現している。かつての書き言葉と話し言葉の時代から、どちらでもない言葉の世界が始まっている。

石川は、手で筆圧をもって書いたものが書き言葉であって、ワープロを使って書いたものは、書き言葉ではないという。

“いま、私たちが迎えているのは、「文字社会」の一変種なのではなくて、従来存在しなかったまったく新しい、「書く」と「かく」ことの終焉の時代——おしゃべりの時代——なのである。”⁽³⁾

石川のように手で書かなければ書き言葉ではないという主張から、書き方はワープロでもタイプライターでもかまわないが、書かれたものはモノでなければならないという「グーテンベルグ派」まで、書かれたもののインプットからアウトプットおよびその流通と利用にはさまざまな議論がある。ここではインプットすなわち書くという側面での議論はとりあげないが、モノでない書かれたものが、今までなかった性質をもっている、という意味では新しい書き言葉の時代が来ているといえよう。

インターネット上の情報はラジオやテレビ放送と似ているところがある。これはばらばらで脈絡がなく、そしてすぐに消えてしまうものが中心である。いってみれば話し言葉を空間的に拡大したようなものである。それはいつ消えてしまうかわからず、またいつ変更されてしまうかわからないものである。

図書に書かれていることはいつまでも変わらない。もし後になって考えが変わったり、間違っていたところを変えようと思ってもそれはできない。改訂版を出すことはできるが、旧版が消滅するわけではない。だからこそ出版するということには誰もが慎重にならざるを得なかったのだ。誰でもおしゃべりはできるが、聞こえる範囲の人だけでなく不特定の多くの人に自分の考えを伝えること、しかも一度言ったら消えることのない形で残すことは重大な行為であった。テレビでしゃべっていることはあまり「残る」ということを考えていない、つまり図書の「不特定の多くの人に自分の考えを伝える」という部分だけを行っている。そして現在の電子的な言説はそれと似ている。

インターネット上の数え切れないほど多くのサイトやチャットは、いかに多くの人が出版すなわち不特定多数の人々に対して語るということをしたがっているかということを示している。誰もが実は出版がしたかったのである。ただし責任のない限りにおいての、というところが従来の出版と違うところである。

出版は自費出版を別にして誰でもできることではなかった。小説を書いても出版社に持ち込み、ポツにされるの繰り返し、という話は、出版するという、出版者、編集者に認められてめでたく本ができる、というのがどんなに稀少なことか、価値あることかということを示している。またこのことはテレビなどと同様、出版はマスメディアとしての権力でもあることをも示している。一方的に選ばれたものだけが一部の者によって発信される。ところがインターネット上にホームページを作ることは誰にでもできることなのである。つまり、誰もがおしゃべりをケーブルの届く限りの遠くまで不特定多数の人に届けることができる、という新しい形のことばの発生である。

このことばは、書かれているが、従来の書かれたモノと異なり、電子的な書かれたもので重さがない。出版ということには価値と権力があり、著者性からアウラが生じ、物理的モノゆえの付加価値がある、そして変わらずに残るといふ従来の書かれたものの特徴を全部失っている。従って書かれてはいても話し言葉に限りなく近いのである。しかもこの話し言葉は生身の人間を介さないから、ただのおしゃべりよりも軽い。このような言葉もテレビ番組をビデオテープに録画するのと同じように、保存しようと思えば保存することができる。但しそれは受手の側ですることであって発信者がするのでないことはテレビの録画と同様である。

4. 不安定なテキスト

書誌宇宙を構成する資料とは内容が固定して保存されるもの、すなわちフォーマルなものである。おしゃべりは消えてしまうから、研究者どうしの会話は有用であってもインフォーマルなので資料にはならない。またフォーマルなものともインフォーマルなもの

のとも判断しにくいもの、時によって、分野によって異なる扱いのされるものもある。前述のような一種の「おしゃべり」は、本来のおしゃべりが資料とみなされなかったのと同じように、書誌宇宙の構成物とは考えなくてよいだろう。ただ、会議の議事録のように、もし従来のように出版されると明らかに資料とみなされるのに、ネットワーク上だとそう見えないものも多い。最近の論文には引用文献が URL (Uniform Resource Locator)、すなわちインターネット上の所在地で示されることが多くなった。しかし少し後になって見ても既にその情報は更新されて新しい情報しか出ていなかったり、URL 自体が消滅してしまっていることもしばしばある。そうするとわたしたちは、やはり電子的な情報は短命だとか当てにならない、と感ずることになる。実はそのような資料は今までも灰色文献で、なかなか所在も掴めず、入手もできなかったものなのだから、手にはいらぬのは同じかもしれないのに、ことさらに不安定なものと感じるのは、モノとしてともかくもどこかに存在するというのと、消去キーひとつであつというまに跡形もなく消えてしまったということとの違いから来るのだろう。

フォーマルな出版を電子化しようという電子出版においてもこの不安定感、不信感はずきまとう。かなりの学術雑誌が既に電子化を進めているが、先に触れたように、業績としては最終的に従来のような雑誌で、という要求があるということは、まだまだ電子出版が伝統的な出版と同じようなステータスを得るには時間がかかることを示している。

電子的な書かれたものに対する不安感というのは、上記のような、URL がなくなってしまった、というようなことに対する不安だけでなく、テキスト自体がいかようにも変更できるということに対する受け入れ難さからも来ている、という点は重要だと思われる。安定して保存されるような電子出版であろうと、CD-ROM のようなオフラインでしかも図書ではないにしろモノで提供される電子出版物であろうと、テキストの変更可能性は同じである。つまり、一旦読者がそのファイルを自分のコンピュータにダウンロードした時から読者はその内容をいかようにも変更できるということである。

テキストが固定しないことは著者性の崩壊をもたらし、図書のアウラを消滅させるが、このことは必ずしも否定的に捉えられているのではなく、読者がテキストのなかを自由に行き来したり、テキストと対話したり、テキストを好みに改変しながら読んでいくことができる新しい読書形態の出現として肯定的に論じられてもいる。⁽⁴⁾今のところはそのような、例えば interactive fiction と呼ばれるようなものは、コンピュータゲームの延長上のものとみなされているが、こういったものと従来の固定的な物語の図書との境界は絶対的なものではない。メディアの変化は社会的な問題であると同時に、作品や読者のレベルでも重大な問題であることは、印刷術のもたらした影響を思い起こせば当然いえることだろう。従ってこの問題は長期的には書くことや読むこと自体にすこし

ずつそして結果的には大きな変化をもたらす可能性を持っている。

5. 電子化時代の書誌宇宙

わたしたちは、書誌宇宙の把握をしようとするのだから、書誌宇宙を構成するもの、すなわち文献の性質についていつも考えなければならないし、文献のこの重大な変化という現象からも今後ずっと目を離すことができない。わたしはそのような時代が来ることを全面的に歓迎しているわけではない。というのも、わたし自身現在の環境からはなれて世界を見ることができないからである。少なくとも現在のコンピュータは好きになれないし、書物に対する愛着もある。これはわたしに限ったことではないので、グーテンベルグの印刷術が普及したようにはいかないだろう。電子図書館がはじめて論じられてからすでに30年が過ぎている。しかし、電子的なものの占める部分はどんどん増えるだろうし、それは必然的にわたしたちのことばや文字の環境を変えていくだろう。それはワープロを使うと漢字を忘れる、といった簡単ないいかたではすまされない大きな変化になるだろう。書誌宇宙をとらえるにあたって、今後わたしたちは文献を同定するに際して、必然的にモノとしての単位からテキストを重視した考え方に移行し、それに基づいて目録、書誌、索引などをより統合した環境を作っていかなければならないし、その社会的な意味についてももっと考えていかなければならないだろう。しかし、この変化は従来のようなバラバラの「索引化」状況を改善し、モノとしての図書へのアクセスの困難を解決する道に至るのかもしれない。遠い将来のいつか、もしテキストを直接把握し、あらゆる文献を関連づけることができるようになったとしたら、書誌宇宙はそして図書館は比喩的でなく事実上、巨大な完結しない百科事典となる。

注

- (1) Bush, Vannevar “人の思考のように：Memex” 上田修一編『情報学基本論文集』勁草書房 1989, p.3-24. “As we may think” Atlantic Monthly, vol.176, no.1, p.101-108. この文献自体、引用分析の対象として興味深いものである。情報科学、コンピュータ科学、図書館学の分野で最も引用された回数の多い論文（というよりエッセイ）のひとつである。特にハイパーテキストを扱った著作ではともかくも memex について触れないわけにはいかない、といった扱われ方をされている。また多くの文献集に再録されたり、翻訳されたりしていて、つまり諸版が多い例でもある。わたし自身プリントで読んでいる。但し引用索引もまた、限られた雑誌の範囲で作成されるものだから、例えば日本で出版された哲学書に引用されても、また勿論本稿での引用も、引用索引でカウントされることはないし、従って引用文献として見いだすことも困難である。
- (2) Birkerts, Sven 船木裕訳 『グーテンベルクへの挽歌 エレクトロニクス時代における読書の運命』青土社 1995, p.239.
- (3) 石川九楊 『筆触の構造 書くことの現象学』筑摩書房 1992, p.185.

- (4) Bolter, Jay David “Writing space : the computer, hypertext, and the history of writing” Lawrence Erlbaum Associates, 1991, 258p. 黒崎政男ほか訳『ライティング スペース—電子テキスト時代のエクリチュール—』産業図書 1994, 452p. この図書は、図書自体には著作権が表示されているが、本文を収録したフロッピーディスクが別に入手できるようになっていて、フロッピーの内容に関しては、どのように改変しようと、誰にコピーして譲ろうと著者は関知しない、ということになっていた。(しかし私の購入した原書にはなぜか電子テキスト購入票がついていなかった。途中で落ちたのか、もしかしたらわたしがうっかり捨てたのか、その理由はわからない)。つまり、テキストを読者がいじくりながら読むことをどうぞ実行してください、というのである。しかしわたしには、モノとしての図書が売れることを前提にしていることが、過渡的あるいは中途半端だと感じられた。

(本稿の前半は「学習院女子短期大学紀要」第32号(1994年)に掲載された)

(きくち しづこ 日本文化学科教授)